



▲南部享さん所蔵の7頭の馬が描かれた作品。もともと6頭の馬の絵だったが、縁起が悪いというので後に露山が右上部に1頭を書き足したという。小さな馬が駆けているのが見て取れる。(白石区)



▲南部さん所蔵の絵の裏に残された鉛筆によるスケッチ。露山は、このスケッチをもとに七頭の馬の絵を描き上げたのだろう。



▲この絵の持ち主伴泰治さんの父親が、お気に入り馬をササゲ豆の一種を4斗(60kg)と交換に描いてもらったものだという。(白石区)

## 記憶の断片を集めて

それからの二カ月間、全く手掛かりを得られず、調査はすつかり行き詰まってしまっていた。北海道開拓記念館や道立近代美術館など心当たりを訪ね歩いたが、露山に関する

翌日から、道東の役場や郷

ある種のステータスでもあったに違いない。岩瀬さんは、さらに露山が目の前で描いてくれたという墨絵も見せてくれた。二頭の奔馬を描いた一筆画だ。露山は墨絵も良く描いていたという。岩瀬さんはさらに記憶をたどると言った。「後で落款を押ししてもらいに菊水にあった露山の住まいを訪ねたよ」。次々に判明する手掛かりに気を良くしたが、順調なのはここまでだった。

師は、馬の所有者から持ち馬の絵の注文を受けて描いたという。露山は、大きな農耕馬を専門に描いたという。道東は、大型の農耕馬を中心とした馬産地だった。手掛かりは道東にある。そう直感した。

ある文献や資料はない。画廊や古美術商にも問い合わせた。経歴の全く分からない作家だという。イライラだけが募る。そんな時、あてもなく文献を調べていると一冊の本と出会った。「馬産王国・釧路」という釧路地方の馬産の歴史を著したものだ。読み進めて行くうちに、ある記述が目が止まった。明治末期、馬産地として興隆した十勝や釧路地方に、各地から馬絵師と呼ばれる人たちが渡ってきた。馬絵師は、馬の所有者から持ち馬の絵の注文を受けて描いたという。露山は、大きな農耕馬を専門に描いたという。道東は、大型の農耕馬を中心とした馬産地だった。手掛かりは道東にある。そう直感した。

土資料館の調査を始めた。だが、容易に手掛かりは得られない。数日が経ったころ、開拓記念館から一本の電話が入った。「道南の八雲町にある旅館で露山の絵を見た」という。道南と聞いて少しがっかりしたが、久しぶりの新しい発見だ。早速、八雲町の温泉旅館「熊嶺荘」を訪ね、露山の作品を見せてもらった。馬の肖像画と、ふすま絵と思われる大きな墨絵だった。「これは、父親が露山に描いてもらったもの。父はよく露山と酒を酌み交わした仲らしい

▲かけじく様の奔馬の墨絵。露山の得意とした一筆画だ。岩瀬功さんが、露山に目の前で描いてもらったもの。昭和二十年ころ、小豆二斗(三十キロ)と交換だったという。(白石区)



よ」と旅館の主、酒井敏男さん(五六)は言う。もともと酒井さんの実家は平岸にあった。大の馬好きだった酒井さんの父親は、道東の馬の共進会に度々出かけ、露山もよく同行したという。思わぬところで露山と道東のつながりを知った。さらに酒井さんは、ある団体を紹介してくれた。これが露山に関する重大な情報であったことを知るのは、札幌に戻った後のことだった。酒井さんが教えてくれた社団法人日本馬事協会は、馬の改良など馬事振興を目的とする団体だ。市内にある北海道支部の事務所を訪ね、露山の事を聞いてみた。係の人は少し考えると、電話をかけた。心当たりがあるらしい。しばらくすると「音更町に、長年露山について調べている人がいるそうだ」とある人を紹介してくれた。慌てて連絡先を聞き取り、礼を言って協会を後にした。思わぬ事の成り行きにぼう然となっていた。

※共進会・農産物や工業製品などを一般に展示し品評・審査する会。